

健康文化

21世紀は新たな倫理観・価値観が求められる時代

鬼武 一夫

例えば、日本国民の平均寿命が80歳を越えるという長寿社会の実現は、「病氣もしたくないし長生きもしたい」という人間の願望に応えた医学・医療の進歩・発展によることは疑いない事実です。20世紀は、これまで「不治の病である」とか「運命だから」という言葉で片付けられてきたような問題、つまり「生」や「死」が、人の手でコントロールできると確信した時代であったといえます。

私の専門分野である生殖生物学を例にもう少し踏み込んだ話をすると、不妊の夫婦の「子供が欲しい」という願望に、体外受精による方法で応えたのは今から20年以上前のことで、ルイーズと名付けられた、いわゆる試験ベビーの誕生は、当時世界的な話題になりました。「卵子の母と産みの母が異なる問題」、「借り腹の問題」など、将来生じるであろう（すでに現実となっていますが）問題についてのさまざまな議論を抱えつつ、体外受精は社会的に認知され、現在、不妊治療として定着しています。その後の技術的進歩により治療方法はさらに拡大し、イタリアでは、民間の医師によって、ネズミの精巣で育てた不妊男性の精子を利用した体外受精が、未知なるネズミのウイルスによってヒトの精子が感染する恐れも否定できないという批判にさらされながらも、“不妊治療を望む本人の意思に沿う”ということで実行されているとの報道があります。一方、精子を使用せず、精子以外の体の細胞の核（体細胞の核）を使用した体外受精が、ネズミや、牛、羊、サルなどを用いて実験的に行われ、精子に依存をしない、遺伝子の組み合わせが全く同じである動物、すなわちクローン動物が誕生しています。誕生の事実が大々的に報道される一方で、クローン羊ドリーの誕生は1%以下の確率であったことや、誕生したクローン牛の多くに出産異常見られたことなどは余り知られていません。

このクローン技術の開発は、生物進化の中で確立してきた哺乳類の繁殖方法とは全く異質であり、倫理面において多くの問題があるとの認識から、日本においてもヒトに応用するような実験は認められていません。また、倫理面のみならず、次のような問題点があります。すなわち、体細胞の核を卵子に注入す

ることにより、注入した“核（遺伝子）”が、どのようにして受精卵の核と同様の状態に戻るのかについては依然解答が得られていないからです。もし、受精卵の核と同様な状態に戻る過程で、注入した核（遺伝子）に何らかの障害が生じたとしたらどうでしょう。ヒトの遺伝子の一部に異常が生じ、その結果ハンチングトン病という疾患が生じることが知られています。しかも、この疾患は中年に達してはじめて現れるものであり、それまでは判別できないそうです。注入した核に同様の異常が生じたとしても、その症状が現れるまでには40数年という時間が必要なのです。

しかし、今年になって、前述のイタリアの医師を中心に、アメリカやヨーロッパの医師や生殖生物学者が共同して、“子供が欲しいという依頼者の意思に沿った人道的立場”から、クローン人間を誕生させる試みを始めることが報道されました。私は、その研究者グループの中に、K. イルメンゼーという名の学者を見出し、正直驚きました。彼は、ガン細胞を正常の細胞に分化させるなど、発生生物学の分野で数々の優れた研究を発表し、国際的にも著名な学者でした。今から15年程前には、世界の誰もが成功していなかった中で、ハツカネズミの卵（卵子）を精子の力を借りずに発生させることに成功したと発表し、世界的に注目をされました。しかし、それは、K. イルメンゼーの功名心に基づくデータ捏造であることがその後明らかとなり、彼はアカデミックな世界から放逐された筈でした。そのような人間が、“本人の意思に沿った人道的立場”という名目で再び復活できる“生命科学の環境”が、今、目の前にあることに私たちは警戒すべきだと思います。

第二次世界大戦は、ヒットラーの率いるナチスが思想的手段に用いた“優性学”との決別でもあったはずでした。すなわち、民族間の差別や遺伝的な違いに基づく個人の差別は一切おこなわないということでした。一方、1960年代以降、臓器移植や不妊治療など、人体をどのように取り扱うかを決定するのは“本人の意思”であるというアメリカ型の論理が浸透し、“優秀な男性の精子を集めた精子銀行”や“美人の女性の卵子を提供・販売するシステム”などのビジネスが次々と設立されることも、“他人より優れた人間的資質を求める”という優性思想を助長するものではないかとのいくばくかの不安を抱かせながらも容認され、21世紀に継続されています。

また、人体の設計図であるヒトの遺伝子のほぼ全てが解読され、今後10年間の間に、遺伝子レベルでの発病の仕組みの解明やそれを基にした薬の開発がかなり進むことが予測されています。したがって、人体をどのように取り扱うかが極めて重要な問題となります。これまでどおり、決定するのは“本人の意

思”という論理で乗り越えようとするならば、新たな優性思想が主導権を握ることはないのかなど、従来の倫理観や価値観のみでは対応し切れない新たな課題が生じています。

「広がる欲望」と「それに応える科学と技術」をコントロールできるのは、われわれ自身の「倫理観や価値観」であり、人間らしく生きることの意味について、さまざまな角度から議論をおこない、21世紀にふさわしい「倫理観や価値観」の構築を私たちは急ぐ必要があるように思います。

追補

原稿を書き終わった直後の5月5日に、共同通信社からワシントン発のニュースが配信されました。他人の遺伝子を一部持った、すなわち遺伝子を改変した子供の誕生の話題です。妻の卵子に異常があって子供が出来ないために、別の女性の卵子から採った細胞質を注入して異常な卵子の受精能力を回復させ、健康な子供を誕生させたということです。また、同様の方法で、すでに30人の子供が誕生しているとのこと。何故、問題になるかということ、細胞質にはミトコンドリアという、生き物が生活するうえで必要なエネルギーを生産する小器官がありますが、独自の遺伝子を持っています。この遺伝子もそれぞれの人に固有のものであり、結果的に他人の遺伝子が受け継がれたことになりま。ミトコンドリアの遺伝子異常による疾患も知られているということであり、今後子供達にどのようなことが生じるか不明な点も多いといひます。このような不妊治療は倫理面で問題があり、イギリスでは違法とされ禁止されているそうです。

(山形大学理学部教授・理学部長)